

令和6年度 出雲市文化財調査報告書

矢野貝塚
(矢野遺跡第11次発掘調査)

中山丘陵遺跡
(令和2年度工事立会調査)

令和7年(2025)3月
出雲市教育委員会

令和6年度 出雲市文化財調査報告書

矢野貝塚
(矢野遺跡第11次発掘調査)

中山丘陵遺跡
(令和2年度工事立会調査)

令和7年(2025)3月
出雲市教育委員会

序

本書は、矢野遺跡(出雲市矢野町)内で行った出雲市指定史跡「矢野貝塚」の内容確認調査と、中山丘陵遺跡(出雲市大津町)内の下水道工事に伴う立会調査の成果を収録した報告書です。

矢野遺跡は、縄文時代から続く大規模集落遺跡であり、出雲平野の黎明期から人々が暮らしを営んできた拠点的な遺跡です。今回、その中心部ともいえる「矢野貝塚」の指定地内で発掘調査を行い、弥生時代を中心とした遺構・遺物が良好な状態で地下に残ることを確認しました。

中山丘陵遺跡は、国指定史跡西谷墳墓群の北側に連なる低丘陵に広がる遺跡です。令和2年度、下水道工事中に発見した古墳時代前期の土師器壺とその埋置遺構について報告します。

いずれも限られた調査範囲ではありますが、出雲平野における集落遺跡の様相や地域の歴史を解明するうえで貴重な資料の一つとして今後の活用が期待されます。そして、本書が地域の歴史や埋蔵文化財への理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査、報告書作成にあたりご協力をいただきました関係者の皆様に、厚くお礼申しあげます。

令和7年(2025)3月

出雲市教育委員会
教育長 杉谷 学

例 言

1. 本書は、出雲市が令和5年度(2023)に実施した出雲市指定史跡「矢野貝塚」(矢野遺跡)の内容確認調査と、令和2年度(2020)に実施した、下水道管布設工事に伴う中山丘陵遺跡の立会調査の成果をまとめた報告書である。
2. 調査は下記の体制、期間で実施した。

<現地調査>

○矢野貝塚 内容確認調査(矢野遺跡第11次調査)

調査地及び調査面積	島根県出雲市矢野町 314 約 18㎡
調査期間	令和5年(2023)11月27日～12月8日
調査体制	事務局 森山賢次(出雲市市民文化部次長 兼 文化財課課長) 三原一将(出雲市市民文化部文化財課 主査) 吾郷尚志(同 課長補佐) 須賀照隆(同 埋蔵文化財1係長)
調査員	景山このみ(同 埋蔵文化財1係 副主任)
調査補助員	高橋智沙都(同 会計年度任用職員)
発掘作業員	田邊宏行 寄廣和人(同 会計年度任用職員)
整理作業員	前島浩子 鶴口令子 中島和恵(同 会計年度任用職員)
調査指導	角田徳幸(雲南市教育委員会文化財課課長、出雲市文化財保護審議会委員) 西尾克己(出雲市文化財保護審議会委員)

○中山丘陵遺跡 令和2年度工事立会調査

調査地及び調査面積	島根県出雲市大津町 2712-11 地先 約 25㎡(遺構・遺物確認範囲)
調査期間	令和2年(2020)11月4日～令和3年(2021)1月26日
調査体制	事務局 片寄友子(出雲市市民文化部次長 兼 文化財課課長) 大梶智徳(出雲市市民文化部文化財課 主査) 原 俊二(同 課長補佐 兼 埋蔵文化財2係長)
調査員	須賀照隆(同 埋蔵文化財1係 主任) 石原 聡(同 埋蔵文化財2係 主任)

<報告書作成(令和6年度)>

調査体制	事務局 山崎久美子(出雲市市民文化部文化財課 課長) 三原一将(同 主査) 吾郷尚志(同 課長補佐)
調査員	須賀照隆(同 埋蔵文化財1係長) 景山このみ(同 埋蔵文化財1係 副主任)

調査補助員 高橋智沙都 加藤章三（同 会計年度任用職員）

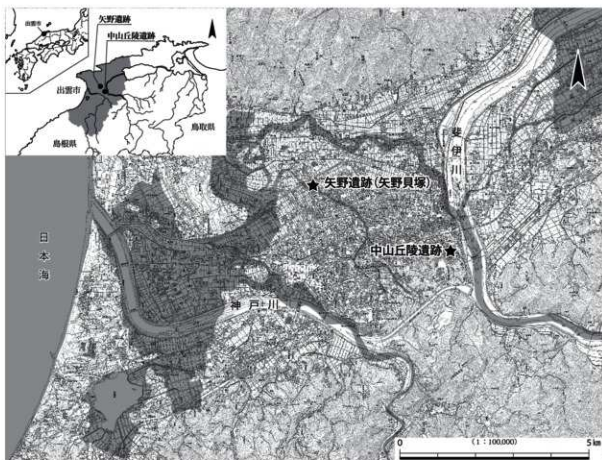
整理作業員 前島浩子 鶴口令子（同 会計年度任用職員）

3. 調査及び報告書作成にあたっては、次の方々からご指導・ご協力をいただいた（敬称略、順不同）。
記して感謝申し上げます。

矢野貝塚土地所有者（調査当時）：萬代慶一（故人）、萬代健治、萬代智子

澤田正明（島根県立古代出雲歴史博物館）、中村唯史（島根県立三瓶自然館・出雲市文化財保護審議会委員）

4. 本書の執筆は景山、須賀が行い、編集は職員の協力を得て景山が行った。
5. 本書に掲載した出土品の実測は、景山、高橋、加藤が行った。
6. 図面・遺物の整理作業は景山、高橋、前島、鶴口が行った。
7. 本書に掲載した写真は、景山が撮影した。
8. 本書に掲載した遺物及び実測図、写真は出雲市文化財課が保管している。
9. 本書で使用した方位は座標北、座標は世界測地系第Ⅲ系に基づく。標高は海拔高を示す。
10. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。
SB－掘立柱建物、SK－土坑、SP－柱穴、ST－土坑墓、SX－性格不明の遺構
11. 本書の作成にあたって参考にした文献は、各章末に記した。



調査地の位置 ※網掛けは弥生時代の推定水域

本文目次

第1章 矢野貝塚 内容確認調査(矢野遺跡第11次発掘調査)	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 遺跡の位置と環境	2
第3節 矢野遺跡の調査研究史	2
第4節 調査の成果	4
第5節 結語	14
第2章 中山丘陵遺跡 令和2年度工事立会調査	19
第1節 遺跡の位置と概要	19
第2節 工事立会調査の概要	19
第3節 結語	21

挿図目次

第1図 矢野遺跡第11次調査地の位置	1	第9図 2区 出土遺物実測図(1)	12
第2図 矢野貝塚指定範囲と周辺の発掘調査地点	3	第10図 2区 出土遺物実測図(2)	13
第3図 1区 調査区平面図・土層断面図	5	第11図 貝塚周辺の弥生・古墳時代の推定生活域	14
第4図 1区 出土遺物実測図(1)	7	第12図 中山丘陵遺跡と調査地の位置	19
第5図 1区 出土遺物実測図(2)	8	第13図 基本層序柱状図	20
第6図 1区 出土遺物実測図(3)	9	第14図 ㊸地点土坑略測図	20
第7図 1区 出土遺物実測図(4)	10	第15図 ㊸地点土坑出土土師器実測図	21
第8図 2区 調査区平面図・土層断面図	11	第16図 山地古墳の土師器出土状況	22

挿表目次

第1表 矢野貝塚 遺物観察表(土器・土製品)	16	第3表 矢野貝塚 遺物観察表(金属製品)	18
第2表 矢野貝塚 遺物観察表(石・石製品)	18		

写真図版目次

矢野貝塚

図版1 矢野貝塚周辺の航空写真	
矢野貝塚指定地遠景(西から)	
図版2 1区 完掘状況(南から)	
図版3 1区 調査区西壁(南東から)	
1区 土坑SK108の土器堆積状況(西から)	
図版4 2区 完掘状況(南から)	

図版5 1区 出土遺物(1)	
図版6 1区 出土遺物(2)	
図版7 1区 出土遺物(3)	
図版8 2区 出土遺物(1)	
図版9 2区 出土遺物(2)	

中山丘陵遺跡

図版10 立会調査状況・出土遺物	
------------------	--

第1章 矢野貝塚 内容確認調査

(矢野遺跡第11次発掘調査)

第1節 調査に至る経緯と経過

矢野遺跡は、出雲市矢野町に所在する大規模集落遺跡である。これまで11次に及ぶ発掘調査⁽¹⁾が行われ、遺跡の価値が明らかにされてきた(第1図)。矢野貝塚は、その一画に形成された弥生時代中期から古墳時代前期の貝塚である。発掘調査で貝層や豊富な土器類が出土し、昭和34年(1959)に出雲市の史跡(以下、市史跡)に指定された。現在も、指定地はほぼ当時のまま残されており、指定地東部で行われた発掘調査では、貝塚のほか、居住域等も確認されている(第3節)。

令和2年度(2020)、出雲市文化財課は矢野貝塚の保護・活用について土地所有者と協議を開始した⁽²⁾。活用に向けて史跡全体の再評価を行うため、これまで未調査であった指定地西側における遺跡の広がりを確認する必要が生じた。そこで令和5年度(2023)、土地所有者の承諾を得て、宅地に面した指定地中央部の発掘調査を実施することとなった。



第1図 矢野遺跡第11次調査地の位置

第2節 遺跡の位置と環境

矢野遺跡が所在する出雲平野は、三瓶山の噴火に伴う神戸川の沖積作用により、縄文時代後期頃に形成された沖積平野である。平野西南部には『出雲国風土記』（733年）に「神門水海」の名で登場する潟湖が広がり、神戸川に加え、かつて西流していた斐伊川がいくつかの支流を伴って注いでいた。矢野遺跡が営まれたのは、平野のほぼ中央に位置する微高地上である（例言位置図）。

矢野遺跡周辺では、平野の形成から間もない縄文時代後期頃から人間活動が始まり、弥生時代前期末頃には水稲耕作を生業とする集団が存在したことが明らかになっている（出雲市教育委員会 2010）。また、近隣約 1.5km 四方の範囲に及ぶ「四絡遺跡群」（矢野遺跡・小山遺跡・大塚遺跡・姫原西遺跡・蔵小路西遺跡・渡橋遺跡・渡橋沖遺跡）の核となる集落として、近世に至るまで連綿と生活が営まれた。特に集落が大きく発展した弥生時代には、出雲平野を代表する拠点集落であったとして評価されている（田中 1996、出雲市教育委員会 2010）。

矢野貝塚は、遺跡西南部の旧河道に近い微高地縁辺部にあり、古くからの住宅地に囲まれた畑地が市史跡指定地（指定面積 1.784㎡）となっている（第1図）。今回は、指定地中央部北寄りの、宅地に隣接した一画を調査対象地とした（第2図）。

第3節 矢野遺跡の調査研究史

本節では、矢野貝塚周辺における既往の調査成果をまとめ、その現状と課題を整理する。

矢野遺跡が位置する四絡地区周辺は、戦後間もない時期から土器等の遺物が多く散布するエリアとして知られていた（山本 1948）。1953年、特に遺物散布の多い地点において、山本清氏を中心とする旧島根考古学会が矢野遺跡初の発掘調査を実施した（第1次調査）。ヤマトシジミを主体とする貝層や弥生時代前期から古墳時代初頭の土器をはじめとする豊富な遺物が発見され、周辺にも同様の遺構や遺物包含層が相当の規模で存在すると推測された（池田 1956、山本 1957）。この調査で得られた成果は、山陰地方の弥生時代集落研究に資する発見として評価され、矢野貝塚の市史跡指定に結びついていた。さらにこの頃、大谷從二氏によって付近で新たに縄文時代後・晩期の土器が採集され、人々の定着時期がさらに遡る可能性も示された。

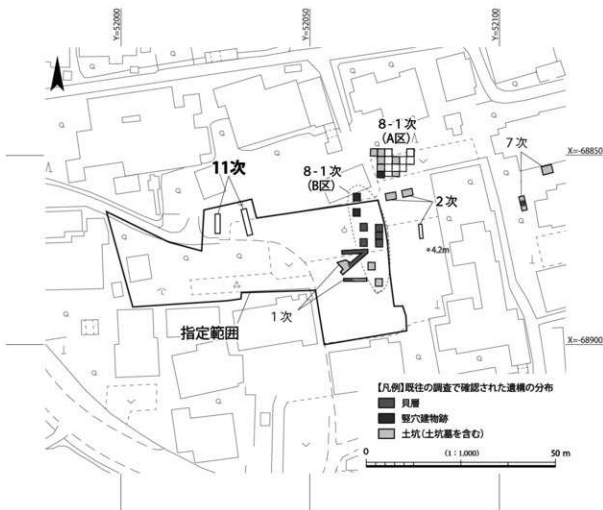
その後、1971～1973年に西尾克己氏らが実施した指定地東側の緊急発掘調査（第2次調査）で、弥生時代後期前葉の土坑墓が確認され、副葬品とみられる碧玉製の管玉も出土した（東森・西尾 1980）。

1991年には、第1次・第2次調査で発見された各種遺構の広がりを把握するため、田中義昭氏らが指定地北東部の発掘調査（第8-1次調査）を実施した。この調査では、第2次調査区の北側にA区、第1次調査区の北から東側にかけてB区が設けられ、A区では竪穴建物跡や土坑墓とみられる遺構、B区では貝層と複数の竪穴建物跡とみられる遺構が発見された。加えて、両区画から土器を中心とする大量の遺物も出土した。重複した竪穴建物跡や土坑墓とみられる土坑群、ブロックに分かれた時期

の異なる貝層等が確認されたことで、弥生時代中期中葉から古墳時代前期まで継続して貝塚周辺で生活が営まれていたことが分かった（田中 1992）。同じ頃、出雲市教育委員会が行った小規模調査（第7次調査）で、指定地の約70m東側でも貝層が確認され、貝塚がさらに広範囲に及ぶ可能性が高まった（出雲市教育委員会 2000）。

以上の発掘調査により明らかになったのは、①貝層は指定地東側の直径約40mの範囲を中心に広がる、②貝塚北側に生活域（居住域、墓域）が近接する、③弥生時代中期中葉から古墳時代初頭の生活域である、という3点である。この調査成果により、貝塚を形成した集団の存在や、矢野遺跡西南部での継続的な居住の様子が浮かび上がってくる。

しかし、以上の成果が示すのはあくまで指定地東部の状況であり、史跡全体を評価するには情報が不足している。この史跡をより正確に理解するためには、指定地内の未調査地点（中央～西側）での内容確認調査が不可欠であった。



第2図 矢野貝塚指定範囲と周辺の発掘調査地点

第4節 調査の成果

1 調査の概要

第11次調査では、貝塚や居住域の範囲確認を主眼に置いた。調査地は指定地中央北寄りの一面で、東側に1区（南北7.1m×東西1.5m）、その7m西側に2区（南北5.2m×東西1.4m）を設けた。

遺物の有無に注意しながら表土と耕作土を重機で除去したのち、人力掘削によって徐々に掘り下げて遺構・遺物の有無を確認した。基本層序は、両調査区ともに①表土、②褐色～明褐色砂質土（旧耕作土、近世までの遺物含む）、③黒褐色土～黒褐色砂質土（古墳時代～近世初頭の遺物包含層）、④黒褐色砂質土（弥生時代～古墳時代前期の遺物包含層）、⑤黄褐色砂（基盤層、三瓶山噴火時の洪水堆積層）となる。既往の調査では、⑤層上に薄く堆積する黄褐色土層が弥生時代の遺構基盤層と報告されているが⁽³⁾、今回その土層を確認できなかった。特に1区では、⑤層上面で古代の遺物や掘立柱建物跡とみられる遺構を検出したため、奈良時代頃に土地改変を受けた可能性が大きい。したがって、1区⑤層上面で検出した遺構は、本来の形状を保っていないことを念頭におく必要がある。一方、2区では調査区全面で④層を検出した。1区と同様に黄褐色土層は確認できなかったが、弥生時代の地形が残されている可能性があると判断した。

確認した主な遺構は、近世の土坑墓、古代以降の掘立柱建物跡とみられる土坑群、弥生時代から古墳時代初頭の大形土坑等である。遺物は、主に基本層序③層以下の包含層・遺構からの出土で、大半が原位置を保たない。弥生時代中期から古墳時代初頭の土器を主体とし、古くは弥生時代前期中葉まで遡る。古墳時代以降の須恵器・土師器、中近世の陶磁器等も出土したが、小片かつ量もわずかであった。以下、各調査区の遺構・遺物について詳述する。

2 1区の遺構・遺物（第3～7図、図版2・3・5～7）

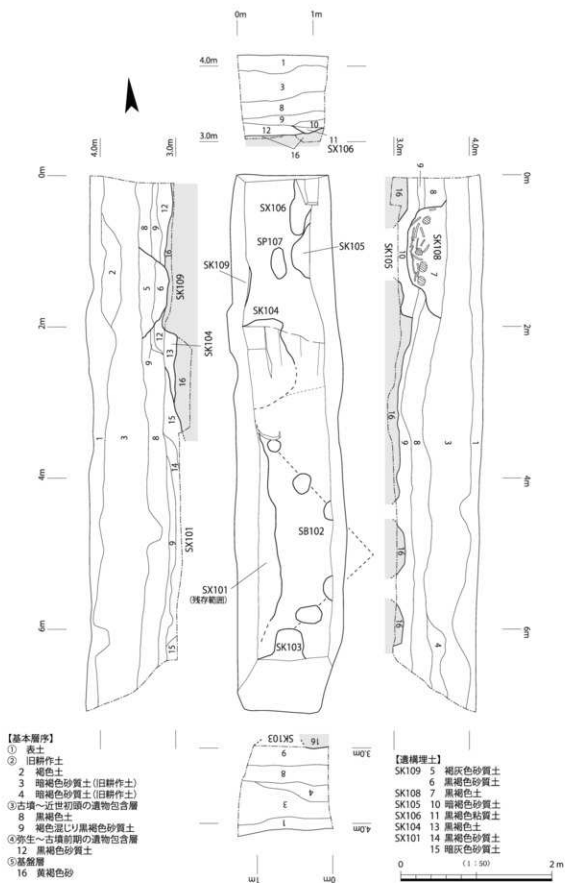
大型土坑SX101 調査区西壁沿いで検出した大型土坑である。検出規模は、壁面で南北4m、深さ0.3m以上。竪穴建物跡の可能性がある。上面で古代の土師器片（4-1）等を検出したため削平を受けているとみられる。埋土中には弥生土器小片を含む。

掘立柱建物SB102 SX101の東側、⑤層上面で検出した。検出範囲が限られるため全容は不明だが、少なくとも約2m四方・3×3間の方形建物に復元できる可能性があり、弥生時代の遺構・堆積層が削平された後に形成された遺構と考えられる。柱穴からの出土遺物は確認できていない。

土坑SK103 SX101の南東側で検出した不定形土坑で、検出規模は東西0.7m・南北0.4m。出土遺物はないが、SK101の南端部と切り合っているとみられ、古墳時代より後の遺構と考えられる。

土坑SK104 南北約1m、深さ16cm程度の不定形土坑で、SX101に先行する。埋土中から弥生時代前期中葉～後葉の甕の口縁部片（4-2）が出土した。

土坑SK105 調査区北東隅で検出した。直径2m程度。③層及び後述するSK108により上部が削られ、形状は不明瞭である。地山が段状に掘削され、中央の直径約1mの範囲は深さ30cm以上。埋土中に



第3図 1区 調査区平面図・土層断面図

弥生時代中期以降の土器小片を含む。

不定形土坑 SK106 幅0.3m、深さは0.1m未満。全長は不明だが、南北0.7m程度を検出した。その形状から、溝状遺構の可能性もある。北壁の堆積状況からSK104に先行する。出土遺物なし。

柱穴状遺構 SP107 SK105の西側で確認した。長軸約30cmの楕円形。出土遺物なし。

土坑 SK108 調査区北側で検出した直径約1.5m、深さ50cmの土坑である。多量の弥生土器と自然礫、ごく少量の古代頃の土器小片が出土した。比較的残存状態の良い弥生時代中期後葉の土器(第4・5図)が主体となるが、検出面は③層上面であることから中世末以降に形成された廃棄土坑とみられる。

4・3は壺の口縁部で、端部を玉縁状に仕上げる。4・4～11、5・1～4は中型の甕。4・4～7は、肥厚してわずかに上方へ拡張した口縁端部に凹線文、胴部に列点文が巡る。4・8～11は口縁端部の拡張幅が広がり、凹線の条数も増加する。11は肩部以下の外面が剝離しており、焼成時に破裂した痕跡とみられる。同様の土器はこの他にも確認でき(図版6)、矢野貝塚周辺で土器生産が行われていた可能性を示す資料といえよう。5・1～4はさらに口縁端部が拡張し、凹線の条数も増加する。6・3は頸部に刺突を施した突帯が巡る。以上の甕は、胴部最大径が中位よりやや上にあり、なだらかに膨らむ形状である。5・5～8は甕または壺の底部。5・9・10は大型の広口壺で、ほぼ全形が復元できた。口縁部は朝顔形に開いて端部がやや拡張し、凹線文が巡る。同じく凹線文を施した頸部からなだらかに広がる肩部を経て、上半から中位に胴部最大径がある。いずれも胴部上半まで文様が施され、9は凹線文と羽状文、円形浮文、10は櫛描直線文、羽状文、列点文で飾る。

6・1は砥石片で、材質は流紋岩質凝灰岩。砥面が2面残る。

土坑 SK109 SK108に隣り合って検出した直径約1.2m、深さ約40cmの土坑である。平面形は不明瞭だが、埋土は上下2層に分かれ、下層から中世末期から近世の唐津碗(6・2)が出土した。

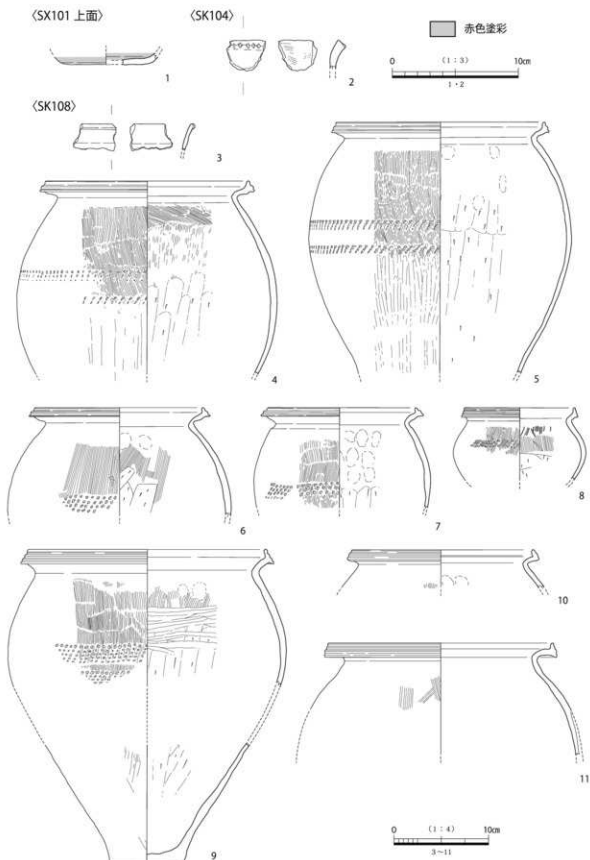
遺構外出土遺物 6・3～11、7・1～13は基本層③層の出土遺物である。6・3～5は弥生時代前期中葉から後葉の土器。3は口径約43cmを測る大型の壺で、口縁部が強く外反し、端部を丸く収める。口頸部に段があり、内外面は粗いハケメ仕上げ。4は大型の甕の口縁部。5はヘラ描直線文と刺突文が巡る甕の胴部である。

6・6～8は弥生時代中期中葉の土器。6・7はく字形の口縁部を持つ甕。8は高坏の坏部で、口縁部が肥厚し、端部外面に刻目を施す。

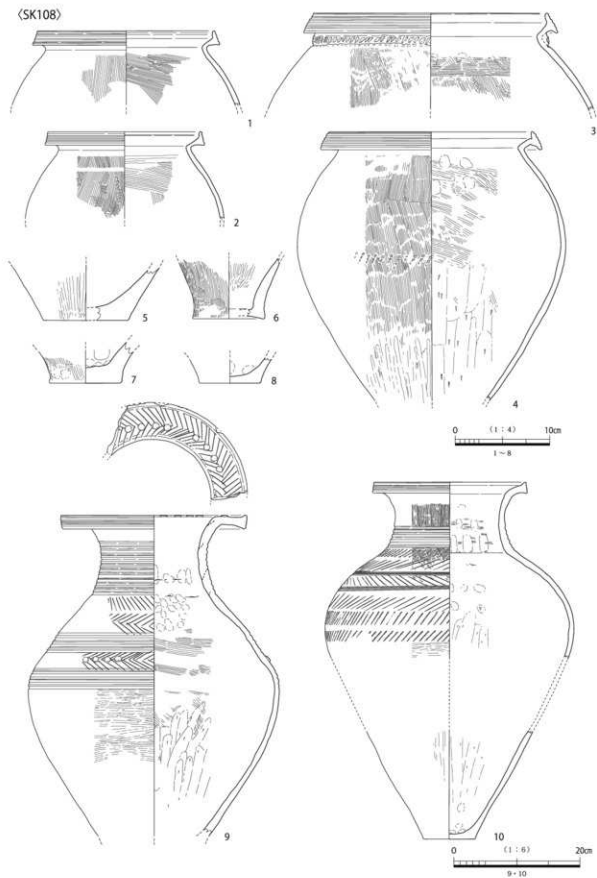
6・9～11は弥生時代中期後葉の土器である。9・10はSK108出土資料と同様の特徴を持つ甕。11は高坏の坏部で、口縁部上面と外面に凹線が巡り、端部に細かい刻目を施す。

7・1～3は弥生時代後期の土器。1は後期前葉の甕、2は後期中葉の壺、3は後期末の甕である。いずれも複合口縁をなし、1・2は口縁部外面に擬凹線が巡る。7・4は穿孔のある底部。弥生時代中期頃の甕か。7・5は穿孔のある胴部片。穿孔以外の加工はないが、紡錘車の可能性がある。7・6は壺の胴部を巡る突帯部分で、九州北部の下大隈式土器の可能性はある。7・7は土師器の甕で、口縁部と底部を欠く。古墳時代後期から奈良時代のものであろう。7・8は土師器の碗で、口縁部がやや外反し内外面に赤色塗彩を施す。8世紀頃のものか。

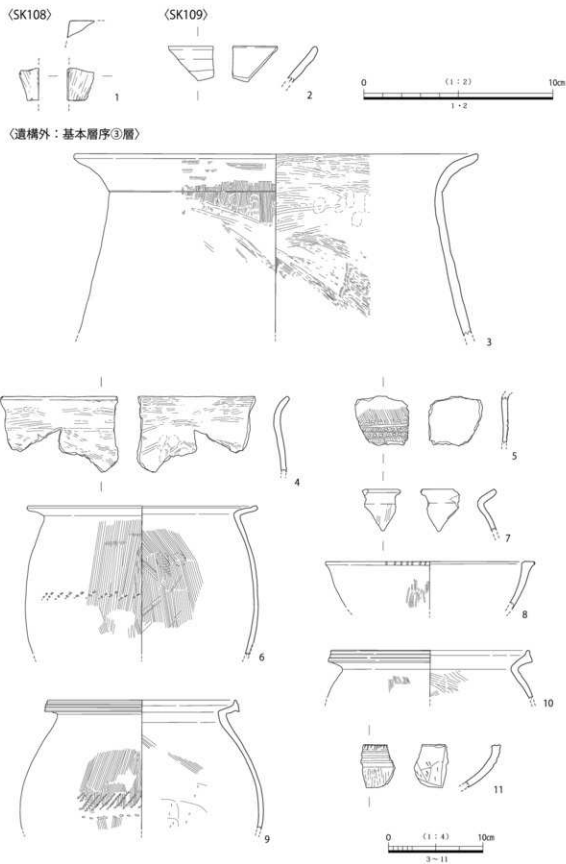
7・9～13は石製品である。9・10は伐採石斧。いずれも断面楕円形で厚みがある、弥生時代の



第4図 1区 出土遺物実測図(1)

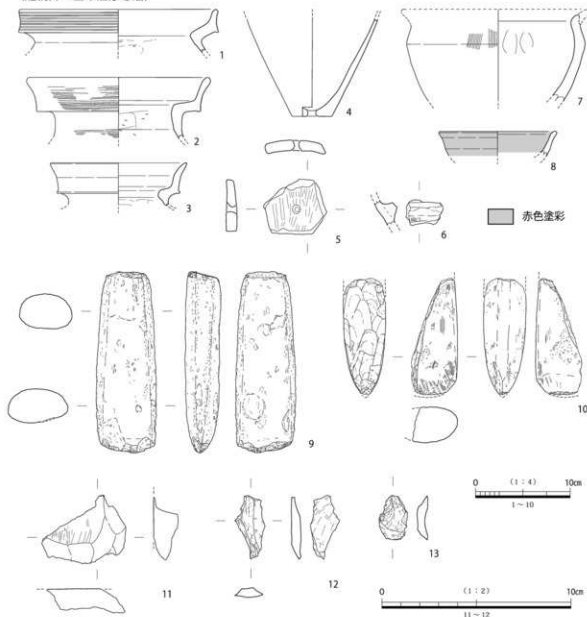


第5図 1区 出土遺物実測図(2)



第6図 1区 出土遺物実測図(3)

〈遺構外：基本層序③層〉

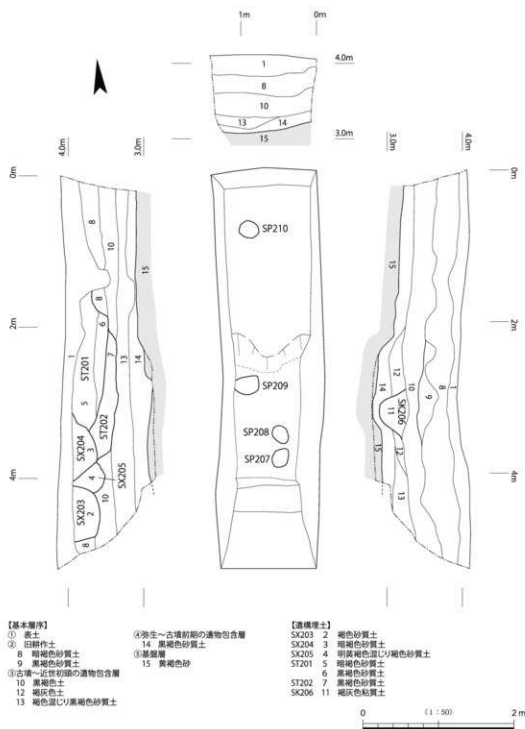


第7図 1区 出土遺物実測図(4)

石斧である。ほぼ完全の9は緑色片岩（塩基性片岩）製で、表面を敲打で仕上げる。10は片岩製で、表面は丁寧に研磨する。刃部先端と基部の破損は、使用に伴うものだろう。7-11は砥石。凝灰岩製とみられ、1面残る砥面には使用痕が観察できる。7-12・13は碧玉製の玉髄片である。

3 2区の遺構・遺物（第8～11図、図版4・8・9）

近世土坑墓 ST201・202 調査区西壁沿いで検出した土坑墓で、②層上面から掘り込まれる。2基が重複しており、上部をST201、下部をST202とした。いずれも墓坑の長軸は約1.4mである。底部には人骨片が散在していたが、遺存状態は良くない。遺物はST202から出土した。9-1は土師質土器の小皿で、底部は静止糸切り。18世紀頃と考えられる。9-2は銅銭で、7枚が錆着して塊になっ



第8図 2区 調査区平面図・土層断面図

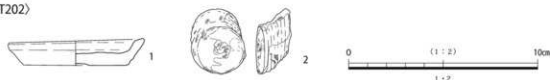
ている。近世墓の副葬品として一般的な六道銭とみられ、表面に繊維が残っていることから、紐で東ねた上で布に包んで副葬されたようだ。なお、墓坑内や人骨、副葬品に被熱の痕跡は認められない。

不明遺構 SK203～205 近世土坑墓の南側にあり、近世以降の掘削の可能性はある。出土遺物なし。

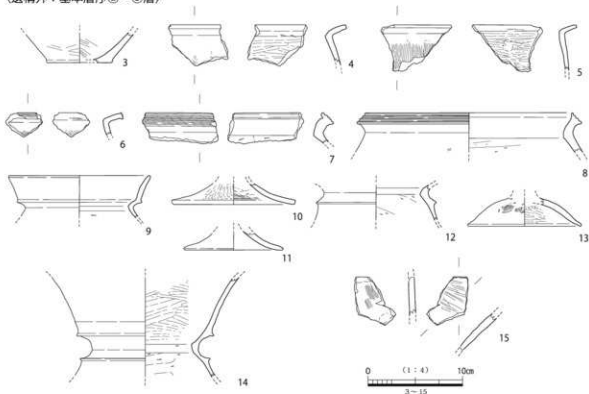
土坑 SK206 調査区東壁沿いで検出した、直径 65cm、深さ 40cmの土坑である。出土遺物はないが、12 層上面から掘り込まれているため、古墳時代以降の遺構と考えられる。

柱穴状遺構 SP207～210 地山上で検出した柱穴群である。北側に 1 箇所、落ち込んだ南側に 3 箇

〈ST202〉



〈遺構外：基本層序②～③層〉



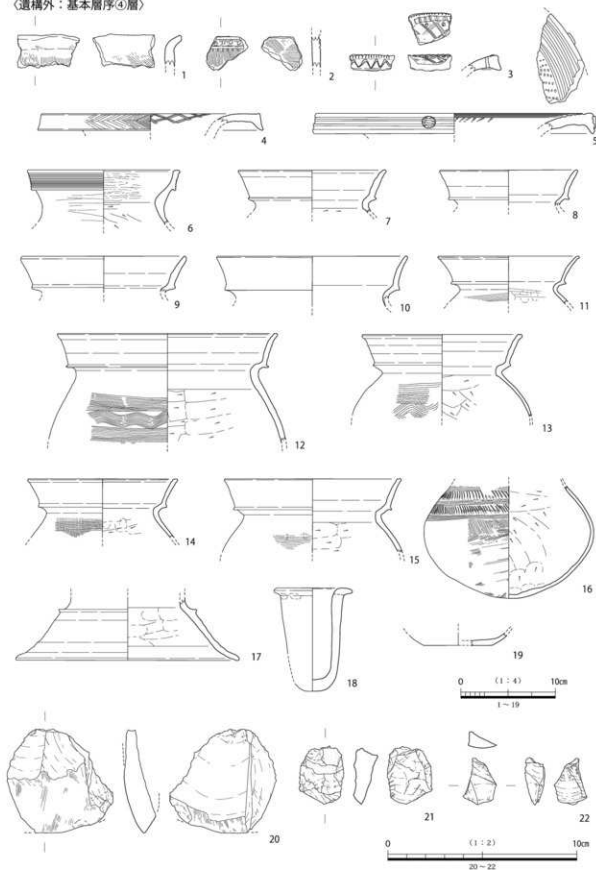
第9図 2区 出土遺物実測図(1)

所あり、配置に規則性はうかがえない。出土遺物なし。

遺構外出土遺物 9-3～15は基本層序②・③層出土の土器である。9-3は弥生時代前期の壺の底部。内外面に精緻なヘラミガキを施す。9-4～6は弥生時代中期中葉の甕の口縁部。4・5は、くの字形に外反し、6はやや肥厚した口縁端部に櫛描直線文が巡る。9-7・8は弥生時代後期前葉の甕の口縁部で、端部が上下に拡張して凹線文が施される。9-9～14は弥生時代後期末の土器。9は複合口縁甕の口縁部、10・11は低脚坏の脚部である。9-12・14は直径20cm程度の中形の鼓形器台。12は脚台部で、内面調整はヘラケズリ。14は口縁部と脚端部を欠くが、器受部は内面を丁寧に磨き、脚台部はヘラケズリで仕上げる。9-13は小形の蓋で、つまみ部分を欠く。外面をハケメ、内面をヘラミガキで仕上げる。9-15は古墳時代の土器とみられるが、器種不明。

10-1～22は基本層序④層の出土遺物である。10-1・2は弥生時代前期中葉～末頃の甕。1は短く外反する口縁部を持ち、内外面を粗いハケメで調整する。2は1区③層出土の6-5に類似する。10-3～5は弥生時代中期中葉～後葉の広口壺の口縁部である。口縁部上面及び端部外面に施文する。3は櫛描格子文と無軸羽状文、4は櫛描の格子文と波状文のほか、穿孔や刻目を施すなど華美な印象を受ける。5は凹線文と刺突文、円形浮文を施す。10-6は弥生時代後期中葉の壺。複合口縁には擬

遺構外：基本層序④層



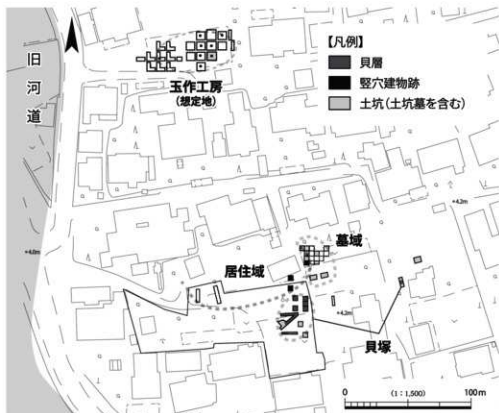
第10図 2区 出土遺物実測図(2)

凹線文が巡り、頸部外面と口縁部内面はヘラミガキ、頸部内面はヘラケズリで調整する。10・7～18は弥生時代後期末頃の土器である。7～15は小・中形の甕で。基本的に口縁部～頸部は内外面調整ナデ、胴部は外面をハケメ、内面をヘラケズリで薄く仕上げ、櫛描の直線文や波状文を巡らせる。口縁部は複合口縁で、端部を丸くおさめるもの（7～11）と面取りするもの（12～15）がある。16は丸底の胴部。胴部上半には櫛描直線文に加えて二枚貝による刺突文も施される。10・17は鼓形器台の脚部。筒部の立ち上がりやや垂直であり、同サイズの10・12・14と比較して筒部が長い。10・18は漆採取容器である。漆は付着していない。弥生時代後期末から古墳時代初頭の類例が出雲市内の中心的な弥生時代の集落遺跡から出土しているが、18は最大級の資料となる⁽⁴⁾。10・19は土師器の坏で、内面が黒色を呈する。古代～中世頃のものか。

10・20～22は石製品等である。20は石斧の刃部片で、安山岩製。柱状片刃石斧の可能性もある。21は珪質片岩の玉髄、22は黒曜石の剥片である。

第5節 結語

第11次調査では、弥生時代から古墳時代初頭の竪穴建物跡の可能性のある遺構や土坑等を検出したことより、指定地東部に存在する居住域がさらに西へ広がる可能性を示した。既往の調査成果を踏まえると、貝塚周辺における弥生時代の生活域（居住域、墓域、貝塚）は少なくとも東西200m、南北80mに及ぶと考えられる（第11図）。また今回、宅地に隣接した地点においても、地下には遺構・



第11図 貝塚周辺の弥生・古墳時代の推定生活域

遺物がほぼ良好な状態で埋蔵されていることを確認できた。このことから、指定地北側の住宅地の地下には、貝塚を形成した人々の中心生活域が残されている可能性が大きいだろう。

出土遺物の主体となる弥生土器は、その大半が後世の遺構・包含層に含まれたものであったが、既往の調査で確認されてきた器種構成や型式の傾向に大きな差異は認められなかった。ただし今回の調査では、1区の廃棄土坑SK108を中心として、摩滅が少ない弥生時代中期後葉の土器の出土割合が高かった。このことから、中期後葉の遺構や包含層に含まれていた土器群が、土地改変に伴い一括して廃棄されたとも推測できる。また、特筆すべき遺物としては九州由来の土器（7-6）や、漆採取容器（10-18）、焼成時に器面が破裂した土器片（4-11）などがある。これらは既往の調査でも確認されており、他地域との交流や、集落内での生産活動をうかがわせる重要な資料として評価できる。

以上の成果が得られた一方、指定地西南部の一带については今回調査が及ばず、課題として残った。今後も、機会をみて指定地内全域の内容確認調査を実施しなければならない。また、矢野遺跡一带は市内でも宅地等の開発が多いエリアであり、矢野貝塚周辺も例外ではない。開発事業計画を注視し、必要に応じて確認調査を行い、資料の蓄積に努めたい。

註

- (1) 発掘調査次数は、第10次調査の報告書（出雲市教育委員会2024）の整理内容に準拠する。
- (2) 矢野貝塚指定地は、2024年に土地所有者（当時）から出雲市へ寄付いただいた。令和7年3月には看板等を整備し、現地見学が可能となった。今後、歴史学習等による活用も積極的に行う計画である。
- (3) 第2次調査の南無調査区と、第8-1次調査A区東半及びB区南端の調査区では遺構基盤層が確認されていない。
- (4) 矢野遺跡のほか、中野清水遺跡、下古志遺跡等で出土しているが、器高10cm以上の資料は矢野遺跡でしか確認できない。

参考文献

- 池田満雄 1956「矢野貝塚」『出雲市の文化財』第1集 出雲市教育委員会
- 出雲考古学研究会 1986『出雲平野の集落遺跡Ⅱ—矢野遺跡とその周辺—』古代の出雲を考える5
- 出雲市教育委員会 2000『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第10集
- 出雲市教育委員会 2010『矢野遺跡 新内藤川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市の文化財報告 10』
- 出雲市教育委員会 2024『令和5年度出雲市文化財調査報告書』出雲市の文化財報告 56
- 島根県教育委員会 2003『志志本郷遺跡Ⅳ—K区の調査—』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XⅦ
- 島根県教育委員会 2004『大津町北遺跡・中野清水遺跡—一般国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 田中義昭 1989『出雲市矢野遺跡の発掘調査』『古代出雲文化の展開に関する総合的研究—斐伊川下流域を中心として—』昭和63年度科学研究費補助金（一般研究A）研究成果報告書
- 田中義昭 1992「Ⅱ—2 出雲市矢野遺跡第1地点の調査」『山陰地方における古代金属生産の研究』古代金属生産研究会
- 田中義昭 1996「中海・宍道湖岸西部域における農耕社会の展開」『出雲神庭荒神谷遺跡』島根県教育委員会
- 東森市長・西尾克己 1980『矢野遺跡』『出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』島根県教育委員会
- 松尾充品 2006『赤彩土師器』『青木遺跡Ⅱ（弥生～平安時代編）』国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 第3分冊（奈良・平安時代） 島根県教育委員会
- 松本岩雄・正岡睦夫編 1992『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社
- 山本 清 1948『出雲市大塚町土器散布地』『島根考古学』第2号
- 山本 清 1957『島根県出雲市矢野貝塚調査概報』

第1表 矢野貝塚 遺物観察表(土器・土製品)

検出番号	図版番号	調査区	遺構	土層	部種	法量 (cm)			備考	
図版図	番号	調査区	遺構	土層	部種	口径等	器高 (残存高)	器厚		
第4区	1	5	1区	SX101	14層土面	土師器 細か	底部径 6.0	8.6	0.35-0.5	回転ナデ 底部を露き赤色塗料あり
第4区	2	5	1区	SX104	13層	赤生土器 磨	—	(1.3)	0.4-0.8	口縁端部下端に刻目
第4区	3	5	1区	SK108	7層	赤生土器 長頸壺か	—	(2.8)	0.3-0.55	磨減多い 口縁端部が玉縁状
第4区	4		1区	SK108	7層	赤生土器 磨	21.4	(20.5)	0.4-0.8	西蔵文、刺突文
第4区	5	5	1区	SK108	7層	赤生土器 磨	22.0	(26.6)	0.4-0.7	西蔵文、刺突文
第4区	6	6	1区	SK108	7層	赤生土器 磨	19.9	(11.5)	0.3-0.7	西蔵文、刺突文
第4区	7	6	1区	SK108	7層	赤生土器 磨	15.8	(10.6)	0.3-0.5	西蔵文、刺突文
第4区	8	6	1区	SK108	7層	赤生土器 小平壺	11.6	(7.7)	0.3-0.5	西蔵文、刺突文
第4区	9	5	1区	SK108	7層	赤生土器 磨	25.0	33.2	0.3-1.2	底部径8.2cm 西蔵文、刺突文
第4区	10		1区	SK108	7層	赤生土器 磨	19.6	(4.0)	0.4-0.5	西蔵文
第4区	11	6	1区	SK108	7層	赤生土器 磨	23.6	(11.8)	0.4-0.6	胴部以下が焼成時に破裂
第5区	1	6	1区	SK108	7層	赤生土器 磨	18.4	(7.9)	0.4-0.5	西蔵文
第5区	2	6	1区	SK108	7層	赤生土器 磨	16.0	(9.2)	0.3-0.5	西蔵文、刺突文
第5区	3	6	1区	SK108	7層	赤生土器 磨	24.6	(10.3)	0.5-0.6	西蔵文、頸部夾帯・刺突文
第5区	4		1区	SK108	7層	赤生土器 磨	21.4	(28.5)	0.4-0.7	西蔵文、刺突文
第5区	5	6	1区	SK108	7層	赤生土器 磨	底部径 9.0	(5.6)	0.9-2.1	
第5区	6	6	1区	SK108	7層	赤生土器 磨	底部径 7.4	(6.5)	0.5-1.2	
第5区	7	6	1区	SK108	7層	赤生土器 磨	底部径 7.4	(4.5)	1.2-1.9	
第5区	8		1区	SK108	7層	赤生土器 磨	底部径 6.4	(2.5)	0.7-1.0	
第5区	9	5	1区	SK108	7層	赤生土器 広口壺	29.4	(51.2)	0.7-1.5	西蔵文、羽状文、円形浮文
第5区	10	5	1区	SK108	7層	赤生土器 広口壺	24.0	(56.6)	0.7-1.3	底部径8.2cm 西蔵文、刺突文、羽状文
第6区	2	5	1区		5・6層	唐津焼 甕	—	(1.95)	0.4	口縁外面～内面にかけて傷あり
第6区	3	6	1区		8層	赤生土器 磨	42.8	(19.0)	0.7-1.1	矢野3式(大型C型)
第6区	4	6	1区		8層	赤生土器 磨	—	(8.0)	0.5-0.8	矢野3式(C型)か
第6区	5	6	1区		8層	赤生土器 磨	—	(5.0)	0.4-0.6	洗腹、刺突文
第6区	6	7	1区		8・9層	赤生土器 磨	24.0	(15.8)	0.4-0.7	刺突文
第6区	7		1区		8層	赤生土器 磨	—	(4.5)	0.4-0.6	
第6区	8	6	1区		9層	赤生土器 高杯	20.0	(4.9)	0.6-1.4	口縁端部外面に刻目
第6区	9	7	1区		8・9層	赤生土器 磨	19.8	(13.7)	0.4-0.8	刺突文
第6区	10		1区		8層	赤生土器 磨	21.0	(5.5)	0.4-0.8	西蔵文
第6区	11	6	1区		8層	赤生土器 高杯	—	(4.5)	0.6-1.0	口縁端部外面に刻目、西蔵文
第7区	1	7	1区		8層	赤生土器 磨	21.0	(4.2)	0.6-1.6	靑西蔵文
第7区	2	7	1区		8層	赤生土器 磨か	19.0	(6.5)	0.6-1.2	靑西蔵文
第7区	3	7	1区		8層	赤生土器 磨	14.4	(4.5)	0.3-1.3	
第7区	4	7	1区		8・9層	赤生土器 磨	底部径 4.2	(10.3)	0.4-1.0	底部に焼成後穿孔
第7区	5	7	1区		8層	赤生土器 磨	長5.9	幅6.4	0.8-1.1	胴部に焼成後穿孔 転用紡錘車か
第7区	6	7	1区		8層	赤生土器 磨か	—	(2.95)	0.5-1.9	夾帯幅1.8cm 下大甕式土器 蓋の胴部夾帯か

棟号	階	図面番号	出土位置			部材	法量 (cm)			備考
			調査区	遺構	土層		口径	断面 (残存高)	厚	
第7図	7	7	1区		8層	土師器 甕か	—	(9.2)	0.9-1.2	胴部最大径 18.4cm 胎土に赤母多く含む
第7図	8	7	1区		8・9層	土師器 甕	—	(2.7)	0.4-0.7	回転ナデ 内外面に赤色塗彩あり
第9図	1	8	2区	ST202	7層	土師器 甕	7.2	1.4	0.4-0.6	底部回転糸切り
第9図	3	8	2区		10・13層	赤生土器 甕または壺	底部径 6.8	(3.0)	0.5-0.9	
第9図	4	8	2区		10・13層	赤生土器 甕	—	(4.2)	0.5-0.6	
第9図	5	8	2区		10・13層	赤生土器 甕	—	(4.8)	0.35-0.6	
第9図	6		2区		8～13層	赤生土器 甕	—	(2.4)	0.5-0.6	凹線文
第9図	7	8	2区		10・13層	赤生土器 甕	—	(3.5)	0.4-1.1	凹線文か
第9図	8		2区		10・13層	赤生土器 甕	21.8	(4.2)	0.7-1.0	凹線文
第9図	9	8	2区		10・13層	赤生土器 甕	14.8	(4.5)	0.3-0.55	複合口縁
第9図	10		2区		8-13層	赤生土器 低脚鉢	脚端部径 13.1	(2.2)	0.4-0.5	
第9図	11	8	2区		10・13層	赤生土器 または土師器 低脚鉢	脚端部径 10.2	3.0	0.4-0.6	
第9図	12		2区		10・13層	赤生土器 鼓形器台	底部内径 11.0	(3.8)	0.3-0.7	肩部が短い
第9図	13	8	2区		8層	赤生土器 甕	11.8	(2.95)	0.3-0.65	
第9図	14	8	2区		10・13層	赤生土器 鼓形器台	底部径 10.4	(10.4)	0.4-0.6	器受部が広い
第9図	15		2区		10・13層	土師器 器種不明	—	—	0.5-0.8	ハケズ、ヘラミガキで調整
第10図	1	9	2区		14層	赤生土器 甕	—	(3.3)	0.6-1.0	
第10図	2	9	2区		14層	赤生土器 甕か	—	(3.3)	0.9	沈降、刺突文
第10図	3	9	2区		14層	赤生土器 甕	—	(1.7)	0.8-1.6	口縁端部斜目、斜目突部、 穿孔、縞縞格子文、波状文
第10図	4	9	2区		14層	赤生土器 甕	23.0	(1.7)	0.7-0.9	縞縞文、縞縞格子文
第10図	5	9	2区		14層	赤生土器 広口甕	29.4	(2.1)	0.8-1.2	凹線文、刺突文、円形浮文
第10図	6	9	2区		14層	赤生土器 甕	15.3	(5.5)	0.4-1.05	凹線文
第10図	7	9	2区		14層	赤生土器 甕	18.4	(4.4)	0.35-0.7	複合口縁
第10図	8		2区		14層	赤生土器 甕	14.6	(3.7)	0.4-0.5	複合口縁
第10図	9		2区		14層	赤生土器 甕	17.2	(3.9)	0.5-0.7	複合口縁
第10図	10		2区		14層	赤生土器 甕	20.0	(5.4)	0.4-0.6	複合口縁
第10図	11	9	2区		14層上面	赤生土器 甕	14.8	(4.8)	0.4	複合口縁
第10図	12	9	2区		14層	赤生土器 甕	23.0	(11.3)	0.4-0.8	縞縞直線文・波状文
第10図	13	9	2区		14層	赤生土器 甕	16.9	(8.65)	0.3-0.6	複合口縁 縞縞直線文・波状文
第10図	14	9	2区		14層	赤生土器 甕	15.8	(6.2)	0.3-0.6	複合口縁
第10図	15	9	2区		14層	赤生土器 甕	18.8	(7.8)	0.4-0.6	複合口縁
第10図	16	9	2区		14層上面	赤生土器 甕	胴部最大径 17.9	(11.9)	0.3-0.6	縞縞直線文、二枚貝刺突文
第10図	17	9	2区		14層	赤生土器 鼓形器台	底部径 23.6	(6.7)	0.5-0.7	
第10図	18	9	2区		14層	赤生土器 湯瓶取首器	7.4	10.9	0.75-1.2	漆の付着なし
第10図	19	9	2区		14層	土師器 甕	7.2	(1.1)	0.4-0.6	内面黒色

第2表 矢野貝塚 遺物観察表(石・石製品)

探検番号	図記号	同収番号	出土位置			路地	石材	法量 (cm)			重量 (g)	備考
			調査区	遺構	土層			長	幅	厚		
第6回	1	5	1区	SK108	7層	砥石	流紋岩質凝灰岩	1.7	1.4	0.9	2.0	砥面2面あり
第7回	11	7	1区		8層	砥石	凝灰岩	3.3	4.4	1.3	12.3	砥面1面あり
第7回	9	7	1区		8層	伐採石芥	緑色片岩 (塩基性片岩)	19.2	5.5~6.3	3.6~3.7	837.5	
第7回	13	7	1区		8・9層	玉髓	碧玉	2.35	1.5	0.5	2.0	輪磨赤褐色
第7回	12	7	1区		8・9層	玉髓	碧玉系	3.4	1.4	0.5	2.0	灰白~灰オリーブ色
第7回	10	7	1区		9層	伐採石芥	片岩	12.3	4.7	3.8	359.0	
第10回	21	10	2区		14層	玉髓	珉質片岩	3.0	2.4	1.15	7.9	赤褐~黄褐色
第10回	20	10	2区		14層	伐採石芥	安山岩	5.5	5.4	1.15	36.9	
第10回	22	10	2区		14層	剥片	黒曜石	2.5	1.5	1.0	3.0	

第3表 矢野貝塚 遺物観察表(金属製品)

探検番号	図記号	同収番号	出土位置			路地	法量 (cm)			備考
			調査区	遺構	土層		長	幅	厚	
第9回	2	9	2区	ST202	7層	銅板	3.4	2.9	1.5	銅板7枚が踏込 表面に布の繊維痕が付着

第2章 中山丘陵遺跡 令和2年度工事立会調査

第1節 遺跡の位置と概要

中山丘陵遺跡は、出雲市大津町地内の丘陵地に所在する遺物散布地として知られる遺跡である（例言位置図・第12図）。南に連続する丘陵には、弥生時代後期後葉以降に国内有数の巨大四隅突出型墳丘墓などが築かれた西谷墳墓群が立地している。太平洋戦争末期からの大規模開墾や軍事施設の設置、また戦後の住宅建設によって、遺跡の地形と景観は大きく変容しており、この間に中山丘陵周辺で弥生土器・土師器・須恵器の細片や黒曜石片などが採集されているが、遺跡の詳細は不明であった（出雲考古学研究会 1980）。その後も開発事業に伴う工事立会調査や試掘確認調査は複数回実施されたものの、大規模な地形改変のため良好な資料は近年まで発見されていなかった。

第2節 工事立会調査の概要

令和2年度（2020）に出雲市が実施した下水道管布設工事に伴う中山丘陵遺跡の工事立会調査において、明確な遺構と遺物を確認することができた。遺構と遺物を確認した地点は中山丘陵遺跡の北部の東側斜面にあたり、谷状の地形痕跡が確認できる位置である（第12・13図）。工事立会は延長約150mを対象に2020年11月25日から2021年1月26日にかけて断続的に実施し、この内延長約25mの区間、現況の丘陵頂部から東へ27～52mの谷部斜面と推定される地点において遺構と遺物を確認した。該当区間の工事による掘削は、幅1m、深さ約1.2～2.8mである。

基本層序は、上から①造成土・攪乱土等、②灰褐色～褐色粘質土（遺物包含層）、③橙色～明黄褐色



第12図 中山丘陵遺跡と調査地の位置

粘土（遺構基盤層）で、無遺物層を挟んだ更に下方に地形の基盤層（地山）が存在する（第13図）。

1 遺構の概要（第13・14図）

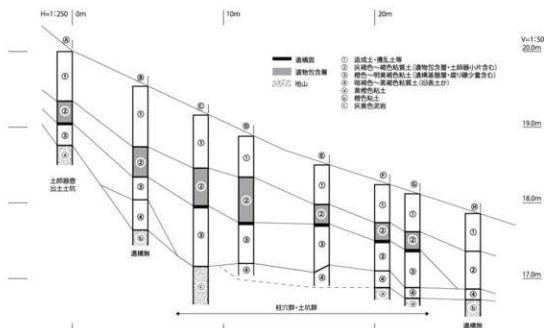
遺構として、④地点で土坑1基を、①～⑥地点付近で複数の柱穴・土坑を検出した。④地点の土坑を除き、①～⑥地点付近の傾斜が緩やかな範囲で遺構が集中している（第13図）。

④地点土坑（第13・14図、図版10） ④地点土坑は推定径70cm前後、深さ25cm程度の小規模なもので、土師器壺が出土している。遺物出土状況から、土坑に土師器壺を埋置していた可能性が高い。

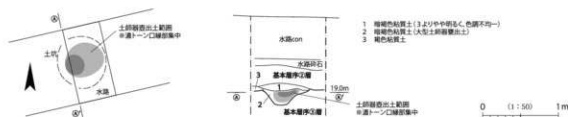
その他の遺構（第13図、図版10） その他の遺構としては、①～⑥地点付近で直径15～45cmの柱穴等を少なくとも5基、③地点で径50cm以上、深さ25cmを測る土坑を1基、⑤地点で径60cm以上、深さ50cmを測る土坑を1基確認した。

2 遺物の概要（第15図）

④地点土坑出土土師器（第15図、図版10） 第16図は④地点土坑内（⑤層）から出土した土師器壺である。風化著しく全体の約1/2を欠損しているが、完形に復元できる。復元値で口径18.6cm、器高



第13図 基本層序柱状図



第14図 ④地点土坑略測図

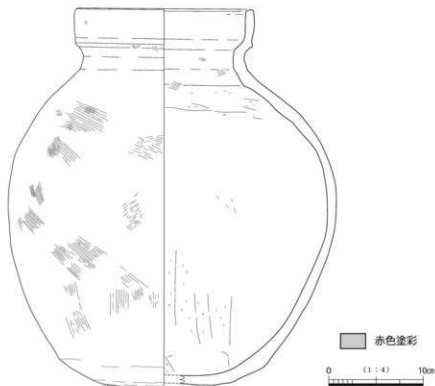
40.1cm、胴部最大径 34.8cmを測る。口縁はやや短い直立した複合口縁で、器壁は厚く口縁上端部には緩い平坦面を持つ。胴部の形態は円形に近い歪んだ楕円形で、底部は径 13～16cm程度の平底状となる。器壁は厚い。全体に歪んだプロポーションであり、底の平坦部で正置した場合、口縁部は最大で 3.5cm程度の高低差が生じる。胴部外面と頸部の内外面にハケメ痕が、胴部内面にヘラケズリ痕が残る。また、口縁部から胴部上半部外面の一部に赤色塗彩の痕跡が残存している。平底状の底部等、やや古い様相を残すものの技法や形態の簡略化が著しく、古墳時代前期後葉から末葉頃の小谷3新段階～小谷4段階（松山 2000・2018）に位置づけられる。

その他の遺物 その他の遺物は全て包含層出土遺物で、いずれも風化著しい土師器小片のみであり、器形等の特定も困難である。ただし、④地点土坑内の土師器壺と焼成・胎土等に大きな差異は見られず、須恵器や弥生土器も確認できない。古墳時代前期後半から中期前半頃の資料であろうか。

第3節 結語

今回の調査では、④地点で確認した土師器出土土坑と③～⑥地点付近で確認した柱穴・土坑群の、大きく2つの成果が得られた。前者はやや急峻な斜面に、後者は平坦に近い谷部緩斜面を中心に築かれており、その間には遺構の空白がある（第13図）。両者は異なる性格の遺構であると思われる。

④地点土坑は土師器壺埋置土坑である可能性を示した。時期は古墳時代前期後葉から末葉である。類似した出土状況を呈する土師器として、山地古墳（出雲市神西沖町）の墳丘外縁で検出された壺棺

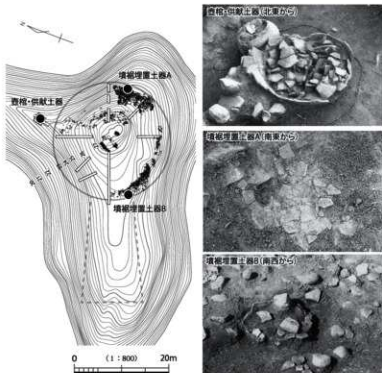


第15図 ④地点土坑出土土師器実測図

と供献土器、埴輪で検出された埋置土器が挙げられる(第16図、出雲市教育委員会 1986・1989、幡中 2023)。壺棺の時期は古墳時代前期末葉であり、時期についても類似している。④地点土坑西方の丘陵頂部付近に古墳が存在していた可能性を示唆しておきたい。

③～⑥地点付近の柱穴・土坑群については、立地する傾斜の緩やかさ、柱穴の多さから、人々の生活域であった可能性が高い。時期についてはやや不明確なもの、古墳時代の前半期であろう。

以上、中山丘陵遺跡の工事立会調査において得られた所見を概観してきた。今回報告した調査は工事立会による簡易的な調査であったが、これまで詳細が不明であった中山丘陵遺跡の一端をうかがえる貴重な調査成果となった。



第16図 山地古墳の土師器出土状況

参考文献

- 出雲考古学研究会 1980「5. 周辺の遺跡」『西谷墳墓群』古代の出雲を考える2
 出雲市教育委員会 1986『山地古墳発掘調査報告書』
 出雲市教育委員会 1989『山地古墳の壺棺』『出雲市埋蔵文化財調査報告書』第2集
 幡中光輔 2023「山地古墳の再検討」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第11集 出雲弥生の森博物館
 松山智弘 2000「小谷式の再検討—出雲平野における新資料から—」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会
 松山智弘 2018「古墳出土土器をめぐって 山陰」『前期古墳編年を再考する』六一書房

写真図版



矢野貝塚周辺の航空写真（上が北、2021年8月撮影）



矢野貝塚 指定地遠景（西から）



1区 完掘状況（南から）



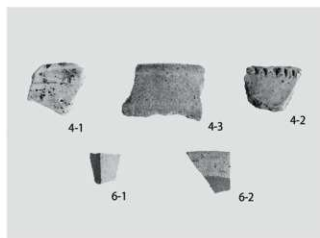
1区 調査区西壁（南東から）

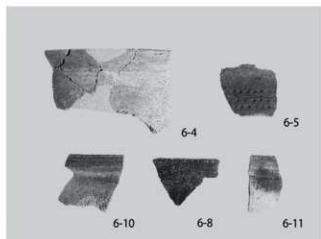
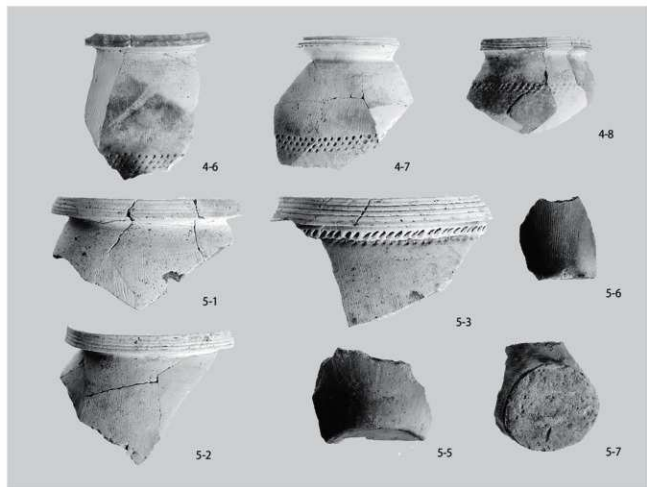


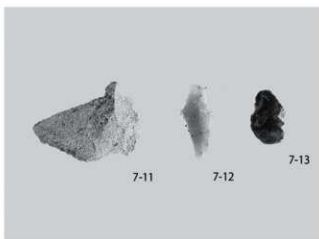
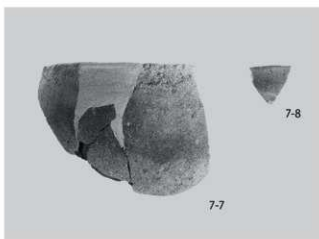
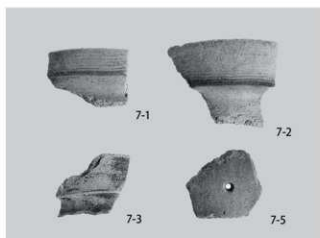
1区 土坑 5K108 の土器堆積状況（西から）

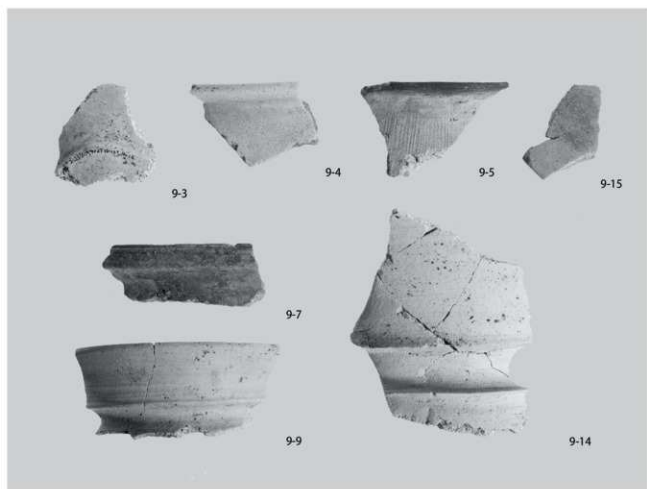
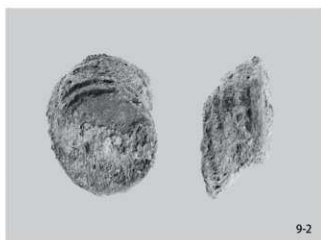


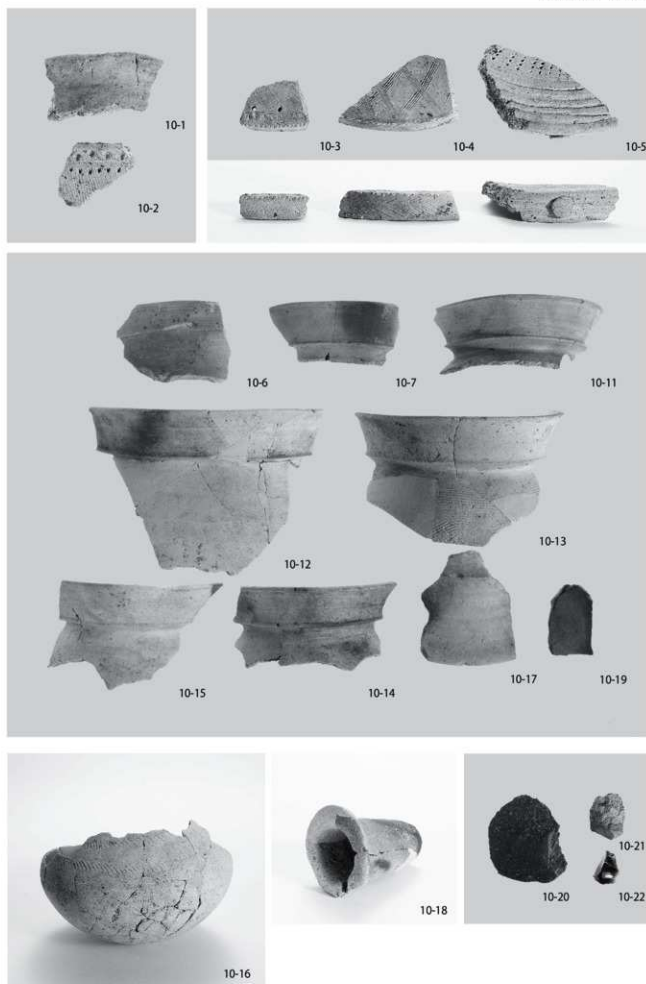
2区 完掘状況（南から）













調査状況 (⑥地点から西方丘陵頂部を望む)



③地点土坑断面 (西から)



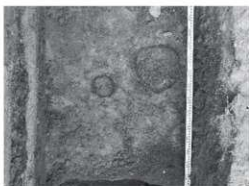
①地点土坑断面 (西から)



⑤地点土坑断面 (西から)



①地点土坑出土土器



①～⑤地点間柱穴群 (西から)



⑦地点柱穴断面 (西から)

報告書抄録

ふりがな	れいわろくねんどういずもしぶんかざいちょうさほうこくしょ						
書名	令和6年度出雲市文化財調査報告書						
副書名	矢野貝塚(矢野遺跡第11次発掘調査) 中山丘陵遺跡(令和2年度工事立会調査)						
シリーズ名	出雲市の文化財報告						
シリーズ番号	58						
著者名	景山このみ(編)、須賀照隆						
編集機関	出雲市 市民文化部 文化財課						
所在地	〒693-0011 島根県出雲市大津町 2760 TEL (0853) 21-6618						
発行年月日	令和7年(2025) 3月						
	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				発掘要因
サウのいわい 矢野貝塚 (矢野遺跡第11次)	しまねけんいずもし 島根県出雲市 矢野町 314 番地	32203	W 3 (前記和遺跡番号)	35° 22′ 40″	132° 44′ 22″	20231127 ～ 20231208	約 18㎡ 出雲市指定史跡 「矢野貝塚」 内容確認調査
なかやまきやうりやういげき 中山丘陵遺跡 (工事立会調査)	しまねけんいずもし 島根県出雲市 おおくさ 大津町 2712 番 11 地先	32203	W 6 (前記和遺跡番号)	35° 21′ 44.7″	132° 46′ 49.3″	20201125 ～ 20210126	約 25㎡ 下水道管 布設工事
遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項
矢野遺跡	集落跡	弥生時代～近世		掘立柱建物 土坑 柱穴 近世土坑墓		弥生土器 土師器 石器	居住域の広がりを確認
中山丘陵遺跡	集落跡 散布地	古墳時代		土坑 柱穴		土師器	土師器埋置土坑
要約	出雲市指定史跡「矢野貝塚」の範囲及び内容確認を目的として、これまで調査が行われてこなかった指定地中央部において発掘調査を実施した。 調査では、地山上で弥生時代から古墳時代初頭の竪穴建物跡とみられる大型土坑を検出し、指定地東部で確認されていた貝塚に隣接する居住域が、指定地中央部まで広がることが明らかとなった。 また、古墳時代以降の廃棄土坑や遺物包含層から弥生土器を中心とした多量の遺物が出土した。 以上の結果から、指定地内においては、遺構・遺物が良好な状態で残されているのは貝塚周辺だけでなく、周辺の住宅地を含む広範囲に広がると確認した。 中山丘陵遺跡では、下水道管布設工事に伴う工事立会調査を実施した。 工事立会調査では、延長約 25m の範囲において、土坑群・柱穴群を確認した。特筆すべき遺構として、古墳時代前期後葉から末葉の土師器壺を埋置した土坑が挙げられる。 これまで詳細が不明であった中山丘陵遺跡の一端をうかがえる貴重な調査成果となった。						

出雲市の文化財報告 58

令和6年度出雲市文化財調査報告書

矢野貝塚 (矢野遺跡第11次発掘調査)

中山丘陵遺跡 (令和2年度工事立会調査)

令和7年(2025)3月

編集 出雲市 市民文化部 文化財課
〒693-0011 島根県出雲市大津町 2760 番地
TEL (0853) 21 - 6618

発行 出雲市教育委員会
〒693-8530 島根県出雲市今市町 70 番地
TEL (0853) 21 - 6874

印刷・製本 有限会社 西村印刷

